

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 14 日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25760015

研究課題名(和文) 翻訳研究アプローチによる言語規範としての女ことばに関する研究

研究課題名(英文) Women's Language as a Linguistic Norm: Research from a Translation Studies Perspective

研究代表者

古川 弘子 (Furukawa, Hiroko)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：70634939

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本課題の目的は、翻訳テキストにみられる言葉づかいとジェンダー・イデオロギーとの関連性を探ることであった。そのために、主に翻訳テキストの文末詞使用に焦点を当てた定量・定性分析を行った。その結果、翻訳テキストはジェンダー・イデオロギーを普及・維持する媒介物として機能していることが示された。これらの研究成果はイギリス、カナダ、ベルギー、スロベニアの国際学会で5度、国内学会で2度、一般向けの公開講座でも2度口頭発表された。また、論文は国際学術誌で1本、国内学術誌で2本発表された(すべて査読有)。更に2本の論文が、それぞれ書籍の一章分として平成28年度中に発表される予定である(共に査読有)。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project was to investigate the relationship between language use in Japanese translations and gender ideology in Japanese society. This was achieved by analyzing sentence-final particles quantitatively and qualitatively. The result of the analyses showed that Japanese translations function as a mediator of gender ideology. The outcomes were presented at five international conferences (UK, Canada, Belgium and Slovenia) and two domestic conferences, as well as at two public lectures. These presentations were developed into articles, and they were published in one international and two domestic journals, all peer-reviewed. Two more articles have also been peer-reviewed and are to be published as book chapters in 2016.

研究分野：翻訳学

キーワード：翻訳学 翻訳研究 ジェンダー・イデオロギー 規範 文末詞 女ことば 児童文学 セクシャリティ

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 「日本語の女性文末詞は翻訳テキストで過剰に使われ、女性登場人物の女性性が強調されている」と複数の研究者が主張してきた。また、この傾向が「理想的な女らしさ」というジェンダー・イデオロギーを社会に広め、社会で維持されるために重要な役割をしてきたと議論されてきた。しかし、翻訳テキストで女性文末詞が過剰に使われていることを実証するための定量的研究はほとんど行われてこなかったため、分析が求められていた。

(2) 本課題の代表研究者は1990年代に翻訳された作品を中心に文末詞使用の定量・定性分析に基づく実証研究を行ってきた。しかしながら、より新しい翻訳テキストに対する実証研究が求められていた。

以上の2つの理由から、女ことばを言語規範として捉えて翻訳研究のアプローチを用いて研究分析をすることが、翻訳テキストがジェンダー・イデオロギーを広め、維持するためにどのような役割を果たしてきたかを究明するために非常に重要であると考えに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、女ことばという言語規範が翻訳テキストにどう表れ、日本のジェンダー・イデオロギーの構築・強化・維持のためにどのような役割を果たしたかを考察することである。

具体的には、以下7つの課題に取り組むことで、女ことばの言語規範としての役割を明らかにすることを目指した。

- (1) 翻訳テキストの女性登場人物の文末詞使用を定量・定性分析することにより、「女性登場人物の文末詞使用が過剰である」という言説に証拠となるデータを提供する。
- (2) 翻訳者の性別が文末詞使用に与える影響についての定量分析により、男性翻訳者と女性翻訳者では文末詞使用に差があるのか、あるとすればその原因は何かを探る。
- (3) 児童文学の翻訳テキストにおける言葉づかいとその変遷についての定量・定性分析を行い、児童文学と大人向けの文学では言葉づかいに差があるのか、時代によって言葉づかいに変化がみられるのかを検証する。
- (4) 理論面の研究によって、(1)~(3)の分析結果を理論的に説明する方法を探る。
- (5) 西洋と日本のフェミニズム翻訳の比較し、日本にとってのフェミニズム翻訳とは何かを探る。
- (6) 女性登場人物のセクシャリティとその言

葉づかいの関係を文末詞使用の定量・定性分析で探ることにより、その登場人物の言葉づかいには何か明示的な役割が与えられているのかを探る。

- (7) 翻訳規範が翻訳者にどのような影響を与えるのかを、実例をもとに定量・定性分析をした上で検証する。

言語規範として見た女ことばを、翻訳研究アプローチによって考察することは新しい試みであるといえる。翻訳研究とジェンダー研究とを結ぶことで、この分野の発展に少しでも貢献できればと考えている。

## 3. 研究の方法

- (1) 翻訳テキスト分析には、定量的手法では女性登場人物の会話文をすべて取り出し、その文末詞をオカモトとサトウの分類表 (Okamoto and Sato 1992: 480-482) に従って strongly feminine、moderately feminine、neutral、moderately masculine、strongly masculine の5段階に分類した上で結果を分析した。定性的手法では、複数の日本語訳が出ているテキストの一部分を抽出し、翻訳者による言葉づかいの差を詳細に分析する方法を用いた。

- (2) 定量・定性分析の結果についての理論的説明と、西洋と日本のフェミニズム翻訳比較研究は、ジェンダーと翻訳研究を中心に、その周辺分野も含めた文献研究を行った。また、サマースクールや学会に積極的に参加したり、論文投稿をしたりすることによって、理論面の理解を深めることに努めた。

- (3) 翻訳規範の翻訳者に対する影響を検証するためには、翻訳者へのインタビューを行った。

(出典) Okamoto, S. & Sato, S. (1992). 'Less feminine speech among young Japanese females'. In K. Hall., et al. (ed.), *Locating power: Proceedings of the second Berkeley women and language conference, April 4 and 5, 1992, Vol.1*. Berkeley and Calif: Berkeley Women and Language Group: 478-488.

## 4. 研究成果

### 平成25年度

この年度は、(1) 翻訳テキストの女性登場人物の文末詞使用について、現代小説、映画の字幕と吹き替え、児童小説に焦点を当てた分析、(2) 翻訳者の性別が文末詞使用に与える影響の分析、という2つの課題に取り組んだ。

(2) に関しては、筆者の先行研究では男性翻訳者のほうが言語規範に縛られやすいこ

とを示唆する研究データが得られたが、さらなる研究が求められていた。そこで、2000年以降に出版された古典作品の翻訳テキストの女性登場人物の文末詞使用を分析した。この分析に古典作品を選んだ理由は、複数の日本語訳が出版されており、翻訳者が男女ともにいるからである。

分析の結果、以下8つの結果が得られた。

①現代小説の翻訳では女性登場人物の「女らしさ」が文末詞使用によって強調されていた。

その女性文末詞の使用率は現実の日本女性の使用率の約2倍～3.5倍にも上っていた。

性格描写が異なっている女性登場人物の文末詞使用に対する定量分析では、それぞれの使用率が類似していたが、社会が考える「女らしさ」から極端に逸脱している人物の場合には女性文末詞の使用が低かった。

2000年代と1990年代の翻訳テキストの分析結果は類似していた。

映画字幕・吹き替えでも同様の結果が見られた。

児童小説の翻訳は古典作品よりも女性文末詞の使用率が高かった。

児童小説の翻訳テキスト分析では、第二次世界大戦直後から90年代まで文末詞使用率に大きな変化はなかった。

翻訳者の性別による分析では、男性翻訳者のほうが女性翻訳者よりも女性文末詞の使用率は高かった。

これらの研究結果は、日本語ジェンダー学会第14回年次大会(桜美林大学) 翻訳学の国際学会「Did anyone say Power?: Rethinking Domination and Hegemony in Translation (Bangor University, UK) と東北学院大学英語英文学研究所定期講演会(東北学院大学)にて口頭発表された。

また、論文は日本通訳翻訳学会発行の国内学術誌『通訳翻訳研究』(第13号: 1-23、査読有)にて発表された。この論文は後に『日本語論説資料(第50号第5分冊: 374-385、査読有)』へ転載された。

#### 平成26年度

この年度には、前年度から継続して研究している課題2点 (1) 翻訳者の性別が文末詞使用に与える影響、(2) 児童文学における言葉づかいとその変遷 と、新たな課題2点 (3) これまでの分析結果の理論的説明、(4) 西洋と日本のフェミニズム翻訳の比較 の研究に取り組んだ。

(1) に関する研究成果は、日本通訳翻訳学会第15回年次大会(愛知学院大学)と2014年度東北学院大学文学部英文学科公開講義(東北学院大学)にて口頭発表された。公開講義の内容は、翌年発行の『東北学院大学論集 英語英文学』(第99号: 65-74、査読無)

に掲載された。さらに、研究成果をまとめた論文は書籍 *Translating Women: Different Voices and New Horizons* (eds. Luise von Flotow and Farzanah Farahzad, London & New York: Routledge) の1章分として編集者に提出された(査読有、近刊予定)。

(2) については、平成26年度に Bangor University (UK) で口頭発表した研究をさらに掘り下げて論文にまとめた。この論文は、国際学術誌 *Neohelicon* への掲載が決定した (Vol. 42, No. 1: 297-312, 査読有)。

(3) については、本研究が拠っている記述的翻訳研究 (Descriptive Translation Studies) の中心的存在である CETRA Summer School (KU Leuven, Belgium) に書類選考を経て参加し、翻訳学の第一線で活躍する理論家の講義と、理論家や参加者とのディスカッションを通して理論面の理解を深めることに努めた。この CETRA Summer School では、本研究のこれまでの成果をまとめた口頭発表も行った。

(4) については、西洋のフェミニズム翻訳の歴史と方略を探り、日本の現状と比較した「西洋と日本のフェミニズム翻訳」と題した論文を執筆し、日本通訳翻訳学会発行の国内学術誌『翻訳研究への招待』(第12号: 21-37、査読有)にて発表した。ここでは、女性文末詞を含む女ことばによって女らしさが強調される日本の翻訳では、西洋のフェミニズム翻訳とは正反対のアプローチが求められると主張した。

また、前年度に取り組んだ「翻訳テキストの女性登場人物の文末詞使用」についての研究成果を、Poetics and Linguistics Association Annual conference (University of Maribor, Slovenia) にて口頭発表した。

#### 平成27年度

本研究課題が研究計画以上に進んだため、最終年度には本課題を通して関心を持つようになった以下の2点—(1) 翻訳テキストの言葉づかいとセクシャリティとの関係、(2) 翻訳規範と翻訳行為との関係—を中心に研究を行った。

(1) については、女性登場人物のセクシャリティと言葉づかいとの関連性について定量・定性分析をした。(2) は翻訳したが出版されなかったテキストと出版されたテキストを定量・定性的手法で比較分析し、翻訳者インタビューを行った。これら2つの課題はそれぞれが研究テーマとして大きいものであり、今後も継続して取り組んでいきたい。また同年度には、論文執筆と編集作業も集中的に行った。

これらの研究成果は2つの国際学会 Poetics and Linguistics Association Annual conference (University of Kent, UK) と Colloquium for the 60th Anniversary of META (University of Montreal, Canada) で口頭発表された。

また、平成 26 年度に参加した CETRA Summer School での発表内容をさらに掘り下げて執筆した論文が、査読を経て書籍 Culture-related Inquiries in Translation Research (eds. Justyna Giczela-Pastwa and Uchenna Oyali. Pieterlen & Bern. Peter Lang) の 1 章分として採択された (近刊予定)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

- ① Furukawa, Hiroko. 'De-Feminizing Translation: To Give Women Voice in Japanese Translation'. In *Translating Women: Different Voices and New Horizons*, eds. Luise von Flotow and Farzaneh Farahzad. London & New York: Routledge. 近刊予定. 査読有.
- Furukawa, Hiroko. 'Women's Language as a Norm in Japanese Translation'. In *Culture-related Inquiries in Translation Research*, eds. Justyna Giczela-Pastwa and Uchenna Oyali. Pieterlen & Bern. Peter Lang. 近刊予定. 査読有.
- Furukawa, Hiroko. 'Intracultural Translation into an Ideological Language: The Case of the Japanese Translations of *Anne of Green Gables*'. *Neohelicon*. Vol. 42, No. 1: 297-312. 2015. 査読有.
- 古川弘子「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」『日本語論説資料』第 50 号第 5 分冊. 論説資料保存会: 374-385. 2015. 転載. 査読有.
- 古川弘子「男性・女性翻訳者が女の声を読するとき」『東北学院大学論集—英語英文学—』第 99 号: 65-74. 2015. 査読無.
- 古川弘子「西洋と日本のフェミニズム翻訳」『翻訳研究への招待』第 12 号: 21-37. 2014. 査読有.
- 古川弘子「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」『通訳翻訳研究』第 13 号: 1-23. 2013. 査読有.

[学会発表](計 9 件)

- ① Furukawa, Hiroko. 'De-feminised Sherlock Holmes' Woman: A failed attempt'. Colloquium for the 60th Anniversary of META. 19 August 2015. University of Montreal, Canada.
- Furukawa, Hiroko. 'Connie's Language and Sexuality: *Lady Chatterley's Lover* in Japanese'. PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual conference. 17 July 2015. University of Kent, UK.
- 古川弘子「男性・女性翻訳者が女の声を読

すとき」東北学院大学文学部英文学科公開講義. 2014 年 12 月 7 日. 東北学院大学.

古川弘子「男性 / 女性翻訳者が女の声を読するとき」日本通訳翻訳学会第 15 回会年次大会. 2014 年 9 月 14 日. 愛知学院大学.

Furukawa, Hiroko. 'Women's Language as a Linguistic Norm: Research from a Translation Studies Perspective'. CETRA (Centre for Translation Studies) Summer School. 29 August 2014. KU Leuven, Belgium.

Furukawa, Hiroko. 'Over-Feminised Chick Lit Girls in Japanese Translation: The Case of *The Devil Wears Prada*, *Chasing Harry Winston* and the *Shopaholic* series'. PALA (Poetics and Linguistics Association) Annual conference. 17 July 2014. University of Maribor, Slovenia.

古川弘子「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」東北学院大学英語英文学研究所定例講演会. 2013 年 12 月 7 日. 東北学院大学.

Furukawa, Hiroko. 'Gender and Language Ideologies in Japanese Translation: From the 19th Century to the Present'. 'Did anyone say Power?': Rethinking Domination and Hegemony in Translation. 6 September 2013. Bangor University, Wales, UK

古川弘子「女ことばと翻訳—理想の女らしさへの文化内翻訳」日本語ジェンダー学会第 14 回年次大会. 2013 年 7 月 6 日. 桜美林大学.

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

該当なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

古川 弘子 (Hiroko Furukawa)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号: 70634939

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし